



橋本山——自然と調和する人工林が未来の森をつくる

滝川景伍（高知県佐川町・林業家）

250種の植物が育つ人工林

針葉樹と広葉樹が入り混じった天然林のような豊かさもつ人工林。しかもその森は、経済的にも環境的にも高い次元で成り立っている。それが、今回ご紹介する徳島県那賀町にある橋本山です。

この森を大切に育て続けてきたのが、橋本光治^{みつじ}さん、妻の延子^{のぶこ}さん、息子の忠久^{ただひさ}さんです。自家所有林である110haの山林内には、100年前後の木々が森をつくり、なかには樹齢200年を越す大木もあります。そこに、総延長30kmに及ぶ高密度網の作業道が張り巡らされています。

樹種は、スギを主とし、ヒノキ、モミ、マツなどの針葉樹に加え、サクラ、ケヤキ、カシ、カヤ、カエデ、ホオの木などの大きく育つ広葉樹、オンツツジやクロモジ、ミツマタなども生えます。さらにはシダ類やコケ類、キノコなど、その植生はじつに250種類以上あるという調査結果が出ています。

2024年には、国際的な生物多様性保全の枠組みであ

るOECM（保護地域以外で生物多様性保全に資する地域）に登録されました。この森で、橋本家は100年以上にわたり多様な木々を育て、天然更新を進めています。十分に大きくなった木を少しずつ切り出し、生えてきた実生の幼木は残して複層的な樹齢の木々が育つ環境へとつくり上げる、長伐期択伐施業を続けているのです。

曾祖父から続く橋本家の山づくり

多種多様な植物が生きる橋本山。その歴史をひも解くと、光治さん延子さんの代から数えて曾祖父にあたる橋本宇太郎さんの時代、1897年頃からスギの造林に目覚め、40haに植林をしたという記録が残されています。

その山を引き継ぎ、さらに進化させたのが宇太郎さんの息子である橋本陰蔵^{かげぞう}さんです。化石の新種を10種類も発見するという学者肌であった陰蔵さんは、観察に観察を続けて、自然に寄り添った林業手法を確立していきます。その経営方針の根幹を成すのは、植林もしくは天然更新により徐々に混交林へと移行し、長期的に択伐施業を行なってい



くという姿勢です。

針葉樹の単相林ではなく、尾根筋にモミやマツなど直根系で風に強い樹種を残し防風林の役目をさせ、土地がやせているところにはケヤキやカヤを実生で育て、薪炭林として育てているクリやサクラ、カシなどの中でも比較的素性

世代を重ねて育て続けてきた橋本山。自然と調和しつつ経済林としても成立している 写真=稲垣徳文

のいいものは残すようにするなど、それぞれの特性を活かして、近くの木々の生長を補完し合えるように仕立てている。そうすることで、林地がやせず、良質な木材を永代的に得られるようになると確信していたのです。

山の姿に残された想いを受け継ぐ

養祖父である陰歳さんの想いを受け継いだのが、橋本光治さんです。銀行勤めであった光治さんは、1978年の春、32歳で妻の実家である橋本家の山を引き継ぎます。しかしその年の秋に、陰歳さんは息を引き取ります。林業の素人であった光治さんは、陰歳さんから山づくりの教えを乞おうと思っていました。かなわぬ夢となりました。

数少ない陰歳さんのエピソードを光治さんが教えてくださいました。まだ銀行勤めをしていた時代に、休日にか家の手伝いで陰歳さんと山に入った光治さん。1本の細い雑木を切っていると、「兄さん、その木も役をしとるんよ」と陰歳さんに諭されたそうです。たとえ1本の雑木でさえ、何かの役に立っている。物を大切にすると同時に、物を活かすことの重要性を教えてもらったと感じたそうです。

引き継いだ山を毎日見て歩くなかで、光治さんは陰歳さんの山づくりを肌で感じとっていきます。多くを教わることはできませんでしたが、残された山そのものに、陰歳さんの想いが反映され、時代を超えて伝わり、光治さんを導きました。

例えば、橋本山の尾根には、高樹齢のマツやモミ、ケヤキ、シイ、カシなどの天然林があり、場所によってはスギ

やヒノキも生える混交林が、人工林を取り囲むようにして成立しています。マツやモミの根は深根性で風に強く、ケヤキなど広葉樹の枯れ葉は腐葉土をつくりまします。100年、200年を超える長伐期の山をつくろうとした際に、尾根に生えた木々が防風林の役目を果たし、林内の乾燥を防ぎ、さらに枯れ葉が肥料となること

とで土地がやせるのを防いでくれるのです。橋本山は南側が風にあたりやすく、混交林を南側に配置することで、気象災害にも備えているそうです。

このような山づくりは、ひと世代だけで完結することではありません。想いを受け継ぎ、何世代にもわたって「自然と調和した山」を目指していく。このパトンの受け渡しこそが、橋本山の美しい森を構成する鍵となっています。

生命力にあふれる「生きる森」

森の循環を考えた時、植えて、育てて、収穫して、また植えるという現代林業の循環に対し、橋本山では、木々が生きて、自らタネを残して、また生えるという森の生命活動に循環の主体があります。



橋本さん一家。左から忠久さん、光治さん、延子さん

森林を木材のみを生産するための畑と見るならば、前者の循環は一見効率的に見えます。しかし木は野菜と違い、収穫できるまでに最低でも50年という長い時間がかかります。50年後の社会情勢や需要を正確に予見するのは難しい。それは歴史が証明しています。戦後の木材不足によって、奥山の広葉樹林をも針葉樹に植え替えてきた日本では、その後の木材需要や丸太価格の低下により放置された暗い森が広がっています。筆者も11年前に林業の世界に入りましたが、そのような放置林で木を売って生計を立てていく難しさに直面しています。だからといって、すべて切つてリセットしましょう、というのは早計です。森林を丸裸にすることはあまりに非自然的な行為で様々なリスクを背負うこととなります。

だから私は、橋本さんが目指す、森の生命活動を主体とする循環を選びます。手入れ不足の針葉樹林も、少しずつ間伐をすることで、徐々に光が入るようになります。すると、それまで地面に眠っていた様々な木々が芽を出し始めます。それは雑木といわれますが、それらをすべて刈り取ることなく、かといって野放しにすることもなく、森と対話しながら一緒に育てていきます。

植生が豊かになると、虫たちも集まってきて、それを捕食する鳥や野生動物も増えていきます。彼らが、どろりなどの種子を運んで隠したり、食べて排泄したりすることで、森にタネを播いていきます。

土中の環境も見過ごせません。単一樹種のみを育てるやせた土地は水と空気の循環を阻害し、森のダムの効果を弱

めることで、大雨などによる土砂災害を誘引する可能性が高まります。森を豊かにすることは、土中環境を豊かにすることにもつながります。菌糸のネットワークが広がる肥沃な土は水分と空気の循環を促し、保水力を高めます。森に生きる生物が多様になり、土中の環境が豊かになればなるほど、森林そのものの生命力が高まり、「生きる森」が育まれるのです。それを体現しているのが橋本山なのです。

山づくりは「岐路」を迎えている

重要なのは、橋本家はこの森で林業経営を行なっているということです。環境性だけを選ぶのではなく、経済林としても成り立つように仕立てている。高齢の針葉樹が木材販売の主であるが、自然に近い状態にすることで、その針葉樹がより育ちやすいように工夫している。また、広葉樹の有用樹種も一緒に育てることで、未来の需要にも備えているのです。

長年放置された人工林を豊かな森にしていくには時間がかかります。その間に私たち林業者はどのようにして、森と関わっていきけるか。今が「岐路」です。短期的な木材収入だけを目指す林業では限界が来ることは明白です。新たな付加価値の創造や、多角的な森林サービス業の展開、複業による収入の分散・安定化な



尾根筋に生えた、風に強いモミの木や広葉樹。防風林の役目を果たす

ど、多分の努力が必要です。橋本家も、未来へ豊かな森を残すために、木材収入だけに頼らず、講師業や森林ツアーによるサービス業を組み合わせた総合的な林業経営を試されています。

針葉樹も広葉樹も育つ自然に近い森づくり。人が林業経営を成り立たせながら、同時に野生動物や昆虫、鳥類などの棲みかにもなる「生きる森」で、私たちも共に生きていく。橋本山を歩くと、未来の森の姿を想像するヒントが見つかります。詳しく知りたい方は、拙書『橋本山 生きる森をめぐる』をぜひ手に取っていただくと幸いです。📖

『橋本山 生きる森をめぐる』

——調和する林業と自然——



滝川景伍 著
農文協 1980円(税込)

全国から注目が集まる橋本山。その山の姿と橋本光治さんの人生を通して見えてくる日本の林業の未来。自伐林業に取り組む人、これからの森を背負う世代にぜひ読んでもらいたい本です。